

## 御室八十八ヶ所霊場（おむろはちじゅうはっかしょれいじょう）



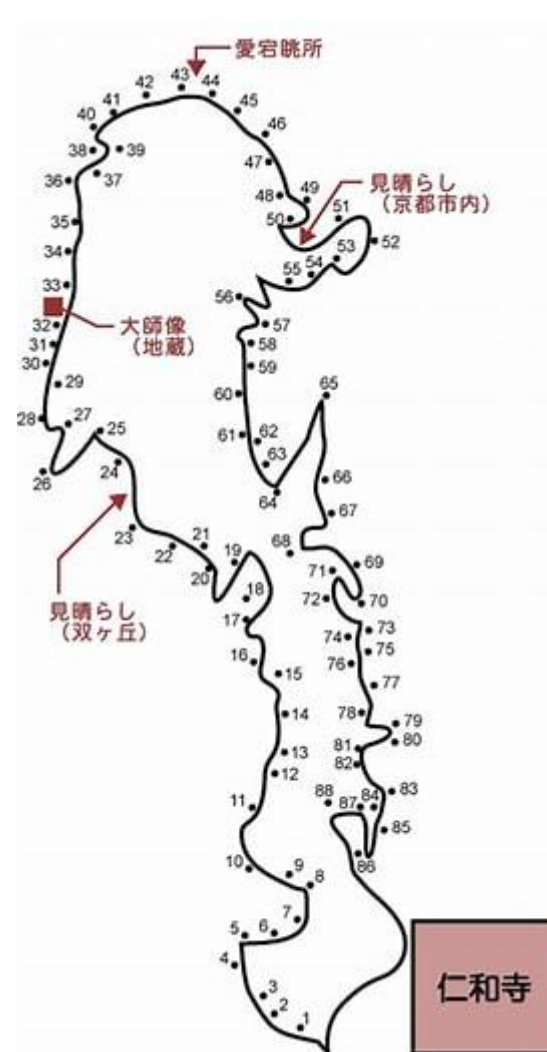
御室八十八ヶ所霊場は仁和寺の北西の標高236mの成就山に四国八十八ヶ所を模した霊場です。



「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図(タイル)を複製したものである。(承認番号 令元情複、第96号)」  
承認を得て作成した複製品を第三者がさらに複製する場合には、国土地理院の長の承認を得なければならない

室町時代以降に弘法大師空海ゆかりの施行八十八ヶ所霊場の巡礼が流行いたしました。しかし庶民は四国まで赴きお遍路行脚は容易なことではなく、ちなみに、本来の四国八十八ヶ所霊場行脚は阿波・土佐・伊予・讃岐の四国を巡る全行程300里（約1450km）徒歩で50日もかかります。そのため、江戸時代には各地で四国を模した行脚の簡易版コースが盛んにつくられたようです。そうした中のひとつ仁和寺のもその一つで1827年（文政10年）、時の仁和寺29世門跡・濟任法親王の発案により四国八十八ヶ所霊場の砂を持ち帰り、仁和寺の裏山・成就山に埋めて、その上にお堂を建て、巡拝路造作したのが御室八十八ヶ所霊場の始まりだそうです。

{手軽・手ごろなハイキングコース}



仁和寺の裏山・成就山に1番から順番に88番までお堂が建てられ四国八十八ヶ所と同じ名前を付けた八十八の小さなお堂が山道沿いに並んでおり、それぞれのご本尊弘法大師が祀られています。

巡り方はまず1番からで、ここに行くには、仁和寺大門をくぐり、境内を北の方へ西門まで行きます。



西門を出て、道案内に沿って1番にたどり着きます。



別の行き方として、一条通りを右に仁和寺大門を仰ぎ見ながら、西の方へ、道案内に沿って右（北の方へ）へ曲がり、道案内の従って1番にたどり着きます。



ここから成就山を時計回りのようにぐるっと約3 km、2時間ほどで巡れます。各、お堂の前で念仏などを唱えられると、ずいぶん時間がかかると思います。お弁当など持って行

かれるとまた、違った気分を味わえられると思います。

途中には「是より阿波の国」とかの目印もあり、四国を巡る達成感も味わえます。また「やすらぎの道」と名づけられた参拝路には自然があふれ、小鳥のさえずりや、四季の草花を楽しむこともでき、手軽なハイキングコースとしても重宝されています。展望的な場所もあり、愛宕山、京都市街地の絶景を眺められます。成就すれば四国88ヶ所霊場巡礼と同じご利益を得られるとのこと。 (一日お遍路体験)





### {エピソード1 握手魔の知人の話}

私の知人の方もよくこのハイキングコースに出かけるそうですが、ある日のこと、前を行くカップルを見たことがあるなと思い、前に回って、思い切って尋ねました。「沢田研二さんですか」、「そうです」「すみませんが握手願えませんでしょうか」「いいですよ」と気軽に返事をもらいましたとのことでした。ちなみに相棒は夫人の田中裕子さんでした。その話を聞いた時の私と知人の会話は、たぶん次のようだったと思われます。沢田さんは京都出身で奥さんにこんな場所を見せたかったのだろう、また、こんな山中で顔も注されなくて、また誰にも邪魔されずに、十二分にのびのびと自然を満喫し楽しんでおられたのでしょう。といった内容の会話だったと思います。続いて、この方から、こんな話も聞かされました。ノーベル賞受賞の田中博士を島津製作所三条工場の門の前で偶然お会いして

(?) 握手をお願いしたところ、快く応じていただいたとのこと。そういえばこの知人は握手魔の毛があるように見えます。一緒に行ったうどんやの親父さんを捕まえて「こんなうまいどんは初めてです。頑張ってください」と握手を求めています。よくよく考えてみれば私との最初の出会いのときも握手を求められました。その時の印象は何とも大きくてやわらかなで、包容力のある手だったことを覚えています。ちなみに私の場合の思い出の握手は、ソフトバンク設立の会社説明会に出席した際に、孫正義氏と握手したのが印象に残っております。若い青年孫正義と今テレビなんかで見る顔が年を感じさせないのが不思議です。後にも先にも大物有名人との握手は、この一度きりです。

### {エピソード2 小学生の頃の思い出}

自宅から小学校まで30分、往復では1時間かけて、毎日歩いて登下校していました。おかげでもっていまだに散歩だけは自信を持って歩いています。

この御室小学校から仁和寺までは5分ほどのところにあり、よく八十八ヵ所には行きました、お世話になった場所でもあります。そんな中で一番印象に残っていることがあります。それは全校生が一斉に山へ出かけた時のことです。最初はおとなしく一番、二番と順に歩

くのですが、そのうち、過去に諸先輩方（？）が新道（近道）をつくり、それが例えば一八番から二三番へ近道、三三番から三八番へ近道をすすみます。つまり「ずる」をします。ところが先生たちが要領よく待ち構えていて「さあ！もどった！もどった！スコヤはあかん！」と諭して元の位置から再出発。後戻りする者と後から来て事情を知らない者が狭い道でガッチンコ右往左往、みんな「誰やこんな道をつくったのは！」とぶつぶつ言いながら引き返していました。お粗末！ —“元の木阿弥”の思い出—